

# 見えない境界を越えて

## —スコットランドのトラヴェラーをめぐるいくつかの考察—

高松 晃子

### 1. はじめに

今から20年以上前の話になる。学部在籍していた筆者は、2年目の終わりぐらいまでは16世紀のイギリス音楽に没頭しており、特にダウランドを崇拝していた。それが、3年目の夏休みには英国民謡(特にスコットランド)の古い録音テープの山と格闘することになるのだから人生はわからない。時代は違っても同じ英国ではないかと思われるかもしれないが、イングランドとスコットランドでは気分的に180度とまではいかななくても150度くらいの相違がある。この大転換を勧めてくださったのが徳丸先生であった。先生いわく、「まずは英国の『いま』を見ることだ、16世紀はそれからでもできる」。そして件のテープを机に並べ、「どうぞ」。試しに聞いてみたら意外におもしろく、採譜を続けていくうちに150曲分くらいの楽譜ができた。その後、いまだに16世紀に戻れずにいる。

これらの録音のなかで、筆者の耳に強烈な印象を残したのがスコットランドの流浪民「トラヴェラー」の歌声であった。タイミングの取り方、声の出し方、コブシのまわし方など、どれをとってもほかの歌い手とは違う。150曲も聴いているうちに、トラヴェラーとそうでない歌い手の演奏が何となく聞き分けられるようになっていたが、それをきちんと説明できるまでには至っていなかった。自分の課題はこれかもしれない、と自覚してから、トラヴェラーとのお付き合いは足掛け20年になる。彼らと筆者とを引き合わせてくださった徳丸先生に、古希のお祝いと感謝の気持ちを込めて、トラヴェラーの歌をめぐる小さな文章をしたためてみたい。

### 2. 文化の境界とミクロな越境

21世紀が産声を上げるのとほぼ時を同じくして、人・モノ・情報・文化・資本が地球上を行き交うスピードは飛躍的に加速した。トランスナショナリズムやグローバリズムが世界標準の思考枠組となるにつれ、有史以来の異文化接触の物語はその内容を大きく変えた。従来型の文化変容論においては、西洋対非西洋、あるいは圧倒的な力を持つヘゲモニー文化の周縁文化支配といった一元的な枠組みにおける「消滅の語り」<sup>(1)</sup>が繰り返されてきたのに対して、世界の中心が多様化した現在、より多方向的でダイナミックな視点が必要になってきたからである。多元的で前向きな「生成の語り」がクローズアップされ、地域文化のグローバル化とグローバル文化の地域化という、一見相対する二方向の動きが現れてきたことなどは、その好例である。

しかしながら、それが「消滅の語り」であれ「生成の語り」であれ、異文化接触論は依然として、国家や国民、民族、あるいは言語や宗教を同じくするグループを単位として語られることが多い。たしかに議論の出発点としては、何らかの集合体を設定して、互いの接触によって生じる変化を説明するのはわかりやすく魅力的である。しかし、人は常に国家や民族のような大それたものを背負って生きているわけではないし、常にただひとつのアイデンティティを感じているわけでもない。さらに、「彼ら」と「私たち」、「外側」と「内側」の境界線は、明瞭だったりあいまいだったりするだろう。境界線とは、必要なときに、必要な濃さで引かれるものである。

非定住を旨とするトラヴェラーたちは、上に挙げた枠組み、つまり国家や国民、民族、言語、宗教のいずれのグループをも大きく踏み越えたことはない。にもかかわらず、異なる文化ユニットとの接触は

日常的なできごとであり、そのつど、彼らも相手も自他の境界線を際立たせたり修正したりあいまいにしたりして対応してきた。本稿では、この「ネイション」に留まるマイクロな越境を検討しながら、彼らが音楽シーンで見出されてから現在までの50年の年月をたどってみることにする。

### 3. トラヴェラーとはだれか

まず、トラヴェラーとはどのような人々なのか確認しておこう。2000年9月にスコットランド政府が刊行したパンフレットは、スコットランドにおいて移動を伴う生活形態をとる人々を総称して「トラヴェラー」と呼び、その中を、ジプシー・トラヴェラー、芸能集団としてのトラヴェラー、新参トラヴェラーの3つに分けている。本稿で議論の対象とするのは第1のカテゴリーに属する人々で、パンフレットではこのように定義されている。「生まれつきあるいは婚姻を通じてジプシー・トラヴェラー集団の成員である人。強い文化的アイデンティティを有しており、それは、拡張家族、氏族のつながり、言語および強い口承文化により補強、維持される」。そして、さらに注目すべき記述が続く。「多くの『伝統的な』トラヴェラーは、非トラヴェラーとは異なる文化をもっていると考えているが、自らをスコットランド人とみなしているため、エスニック・グループであるとは思っていない」(The Scottish Parliament 2000: 1-2)。

彼らが非トラヴェラーとの違いを意識しながらも、エスニック・グループというよりはスコットランド人としてのアイデンティティをもっていることは、スコットランド議会の人権委員会 Equal Opportunities Committee による次のような記述からも読み取れる。同委員会では、上の第1カテゴリーに対し Gypsy/Traveller という呼称を充てて、さまざまなグループを包含する上位グループであると規定し、下位グループのひとつである Gypsy Traveller とは区別されるものとしている。つまり、

Gypsy Traveller とは、自己アイデンティティを有するひとつの独立したエスニック・グループである。1999年の調査では、Gypsy/Traveller の15%が Gypsy Traveller、49%がスコティッシュ・トラヴェラー、8%がロマ、5%がアイリッシュ・トラヴェラー、23%がその他と答えている (Scottish Executive 2004: i)。

このように、Gypsy/Traveller という集団に属する個々のグループは、それぞれに独立したアイデンティティを有しているのだが、スコティッシュ・トラヴェラーやアイリッシュ・トラヴェラーのようにネイションの出自を掲げるグループと、ジプシーやロマのようにエスニシティを打ち出すグループでは、アイデンティティの持ちようが異なっている。前二者は後二者と比べると国民意識が強く、エスニック・グループとは見なしにくい。本稿では、議論の対象を「スコティッシュ・トラヴェラー」に限定し、特に断らずに「トラヴェラー」と記すときには「スコティッシュ・トラヴェラー」を指すものとする。

トラヴェラーの人口を算出するのは容易ではない。移動生活を送る人を数えればすんだのは、過去の話である。現在では通年移動形態を取る者は少なく、半定住または完全定住が一般的である。その結果、いまやグループへの参入を決定付けるには「血筋」が頼りであり、それはグループ外の者では判別が難しい。スコットランド政府の公式発表では1300人程度<sup>(2)</sup>だが、研究者による見積もりでは1万4千人と、数字に開きがあるのはそのためである。多いほうを取ったとしても、それはスコットランド全人口の0.2%余りにすぎない<sup>(3)</sup>。

#### 4. 「クラン」を越える—境界線の保持—あいまいゆえに伝わるもの

トラヴェラーは一般的によく歌う人々だと言われる。レパートリーはバラッド<sup>(4)</sup>をはじめとしたスコットランドの伝承歌謡で、家族もしくは近隣のトラヴェラーを相手に、手の空いたときやケイリー ceilidh<sup>(5)</sup>、キャンプファイヤーの余興として歌われてきた。伝承は口頭によっており、楽譜や歌集のような書かれた媒体は使用しない。直接教えることはまずなく、気楽な聞き覚えによって伝えられるのが普通である。

なぜ歌うのかと聞けば、「僕たちには時間がたっぷりあるからね」と微笑むだけかもしれないが、実際のところ、彼らが歌うのには重要な訳がある。先に引用した、スコットランド政府によるトラヴェラーの定義の第一カテゴリーに記述されているように、彼らは「強い文化的アイデンティティを有しており、それは、拡張家族、氏族のつながり、言語および強い口承文化により補強、維持される」。移動という目に見える特徴を失った場合、「文化」と「つながり」が彼らのアイデンティティのよりどころとなることは明らかだろう。

家族労働を生業にしてきた彼らにとって、実質的な生活の単位は、夫婦家族や血縁家族を含む大きな家族(大家族)である。ただ、内婚を繰り返してきた結果、同じ名字を持つ者は共通の祖先を持つに違いないと信じられており、擬制的出自集団である氏族(クラン)に対する愛着は強い。クランの伝統は、移動範囲に見られる一種の縄張り、生業の種類、生活レベル、形質上の類似、行動様式の特徴などの中に受け継がれる。そしてそのつながりを補強する「強い文化的アイデンティティ」こそが、歌に代表される「口承文化」なのである。それぞれのクランは異なる歌唱スタイルと特定の歌のレパートリーを伝承することになっている<sup>(6)</sup>。このような理由から、クランの境界はいつも明確にしておきたいところであり、クランの伝統である歌をほかのクランの成員の前で歌うということは、すでにひとつの境を越えていることになる。

さて、一般に、複数の文化が会ったときに問題になることは、そのものとしての真正性、正当性の保持である。トラヴェラーの場合、上のようなミクロな越境はしばしば起こったが、真正性すなわちあるクランのレパートリーをそのクランの者らしいスタイルで提示しているかどうかは、歌い手のパフォーマンス内容よりも聞き手の態度や発言によって保証された。トラヴェラーたちは、他の家の人の演奏を聞いて、よく「死んだお母さんの歌い方にそっくりだ」などと言うが、彼らはそうやって必ずしもそっくりでない演奏をやや強引に同質化してしまう。たとえば、スチュワート家のエリザベスが何か歌うと、聞いているトラヴェラーたちが口々に、「お婆さんのルーシーの歌い方にそっくりだ」とか「お母さんのジェーンの声に似てきた」などと言う。ルーシーやジェーンは亡くなっているのものでその場で実際に比べることはできないが、筆者は彼女たちの歌を録音で知っており、その知識をもってすれば「そっくりだ」と言えるほど似ているとは思えなかった。エリザベスのスタイルは細かい節まわしを特徴とする繊細なものだが、ルーシーは太い声で直截的に歌う人だし、ジェーンは鼻に掛かった声の特徴とし、ポピュラー音楽風に手馴れたところがあった。でも、その場ではどこがどういうふう似ているかという話にはならず、どことなく聞いてはいけないような雰囲気もあった。

トラヴェラーによってはこのあいまいさを自覚していて、ひとりになったとき筆者にそれを説明する人もいた。それならなぜ、その場ではそっくりだと言うのかと聞けば、「それは、私が〇〇家の人間だからでしょう」と答える。機会を捉えては同じような質問を繰り返す筆者に対し、だれもが同様の答え方をした。つまり彼らは、実際には似ていないことに気づいていながらも、歌唱パフォーマンスが似ていると口に出して言うことで、ある者がたしかにそのクランの成員であることを確認しているのだった(高松 1999: 138 - 143)。

ただ、クランの伝統といわれるものの内容があいまいであることは、彼らにとってはうまい逃げ道となり、ある意味好都合であるとも言える。あいまいだからこそ、それらしいものがうまく伝わってきたと考えられるからである。彼らの歌う現場をよく観察していると、ある演奏に似ていると言われるパフォーマンス（いわば手本）が、決して同じ場所に同時に存在していないことに気づく。手本は故人に限られていて、聞き手たちは、その場のパフォーマンスを記憶の中の名演奏と比較しているのである。両者を併置しなければ、本当に似ているかどうかという話題そのものを回避することもできるし、似ていないものを似ていると言いやすい。彼らが好む「ファミリー・トラディション<sup>(7)</sup>」は、もしかするときわめて実体のあいまいなものではあるが、手本を常に記憶の中にしまいこむことで、無難に伝えることができるのである。おそらく、同じクランの複数の成員のパフォーマンスをきちんと調べて類似点と相違点を明らかにすれば、「クランの伝統」がどの程度客観的な真実味をもっているかがわかる。しかし、それをトラヴェラーたちに示したところで、彼らは困惑することはあっても感謝はしないだろう。あるいは、彼らにとって相違はすでに自明なことであるから、それを知りながら「そっくりだ」発言を続けることには何の不都合も見出さないだろう。つまり、彼らにとっては「伝えている」「つながっている」と信じるのが肝心なのである。

#### 5. 「トラヴェラー」を越える—境界線の無効化—境界線の創出へ

さて、トラヴェラーたちは、その人口の数字どおりひっそりと生活してきたのだが、1950年代初頭より、世間の注目を集めるようになった。民謡収集家でエディンバラ大学のスタッフであったヘイミッシュ・ヘンダソン（Henderson, Hamish 1919-2002）をはじめとする何人かのフィールドワーカーたちが、彼らの歌や物語を精力的に録音し、それを手掛かりにしてスコットランドの伝統音楽の復興と普及を目的とした活動を始めたのである<sup>(8)</sup>。フィールドワーカーたちの録音活動は、1960年代以降のフォーク・リヴァイヴァル運動と合流して、伝統音楽復興の大きな流れを形作るのだが、当時の一連の動きは、トラヴェラーの意向を無視した「外からの」働きかけであるとしてのちに批判されることになる（Russell 2002: 4）。

さて、ともかくも、ヘンダソンらの尽力でトラヴェラーの歌唱はトラヴェラー・コミュニティから外へ出るようになった。今回の動きには、それまでの「クラン」と「クラン」、「トラヴェラー」と「隣人」といった、双方向的でミクロなコミュニケーションとは決定的に異なる点がある。トラヴェラーの自発的な越境ではなく、「スコットランド人」という共通のアイデンティティを利用した、非トラヴェラーによる「担ぎ出し」だったことである。

彼らの文化を一般に向けて発信したがっていたのは、研究者やフォーク・リヴァイヴァルを推進する歌手や音楽教師たちで、トラヴェラーたちは気がついたらそこに巻き込まれていたというのが実際のところであった。ただ、外側の人々が全くの異文化を無責任に紹介するのと違って、この場合は「外側」の人々が「外側」にいるとの自覚をもっていないことが特徴である。彼らがトラヴェラーを連れ出した大きな理由は、既に失われたと考えられていた「スコットランドの」伝統歌謡を、トラヴェラーたちが口頭で伝承していたことだった。それは事実であり、そのような財産をスコットランド国民が共有することに、理論的には何の問題もない。トラヴェラーと非トラヴェラーの間の境界線は、「スコットランド人」という共通のアイデンティティを持ち出すことにより無効になるのである。

しかし、実のところこれは絶対多数である非トラヴェラーの論理であり、トラヴェラーにとっては逆に、「我々は同じではない」ことを強く意識するきっかけになった。トラヴェラーに対する非トラヴェラーの同胞意識は無自覚なまま拡張され、やがて規範の領域にまで及ぶと、たちまちトラヴェラーたち

は不満を感じるようになったのである。実際に起こった次のような出来事—ラジオ放送のために演奏時間の短縮を強要されたり、レコード録音用の歌にもっともらしいタイトルがついたり、伴奏に合わせた歌唱を要求されたりしたこと—は、非トラヴェラーの「常識」ではあったが、トラヴェラーの歌手を困惑させた。また、優れたパフォーマーは優遇されるという非トラヴェラー的規範は、横並びを基本とする彼らの社会構造のバランスを脅かした。日常生活においては、時にあいまいになったり明瞭になったりする境界線が、いざ戦略的に取り払われてしまうと情情的には逆にくっきりと浮かび上がるのである。

しかも、このようなときに限って、マジョリティーとマイノリティーの間に見慣れた図式が同時に顔を出す。トラヴェラーたちはスコットランドの伝統の担い手として担ぎ上げられる一方で、彼らの録音がレコードになって販売されたり、採譜されたものが印刷物になって刊行されたりしても、その利益は制作者や編集者に渡るだけで、彼らの手元にまですまわることには少なかったのである。パフォーマンスで得た利益を演奏者が回収できないことは、いつも彼らを感じている差別の一つと理解された。結局のところ、「外」に出た歌は、ナショナリズムの文脈で読み替えられてスコットランド民族文化リヴァイヴァルに回収されるか、さもなければ、「トラヴェラー集団」というひとかたまりに帰せられて少数民族の人権問題に帰着するかのどちらかであった。

その結果、トラヴェラーの社会構造に少しずつ軋みが生じていった。特に、ある特定の家や個人が目されれば、当然、それまでどうにか保ってきたクランの尊厳とバランスが不安定になる。結局、非トラヴェラーの抱く同朋意識が強まれば強まるほど、トラヴェラーが彼らに対して常々抱いていた不信感が増幅し、再び越えがたい境界線が引かれてしまったことになる。個人や家族といった小さなユニットが、正しい文脈において正当な評価を得られぬまま国という大きなユニットを背負えば、やがて立ち行かなくなることは目に見えていた。彼らの望む方法で、文化を発信するすべはないものだろうか。

## 6. 内側からの試み—個から始める集団理解

上の問題に注目したのが、アバディーン大学のエルフィンストーン研究所 (Elphinstone Institute, University of Aberdeen) であった。同研究所は、2002年にUK Heritage Lottery 基金から助成金を獲得し、調査・研究・情報発信の主体を、従来型の「アウトサイダー」主導から当事者に移すことを主眼においた、「スコットランド・トラヴェラーの口頭伝承と文化伝統プロジェクト (以下「トラヴェラー・プロジェクト」)」を立ち上げた。近年の民族音楽学はフィールドワークの主体と客体の立ち位置の問題に大きな関心を寄せており (たとえば Chou 2002, Barz and Cooley 1997)、その意味でも、両者を一致させるこの試みはきわめて大きな注目に値する。

トラヴェラー・プロジェクトは、2003年から3カ年にわたって、次のような方針で活動を行ってきた (Russell 2002: 8)。

1. 年齢、性別の異なるトラヴェラー少なくとも50人のインタビューを、完全に記録する。
2. 主要な伝統の担い手の映像記録を作成する。
3. 全ての資料をアーカイブ化し、一般に公開する。
4. 70の学校を訪問し、参加型のワークショップを行う。
5. 10のコミュニティー・グループを訪問し、歌または物語のセッションを行う。
6. 6つの公开发表を行う。
7. 若いトラヴェラーが自らの手で文化伝統を記録するよう奨励する。

8. ウェブサイトでの情報公開を行う。
9. 書籍、CD、ビデオを公刊する。
10. 最終報告書を作成する。

このプロジェクトの特筆すべき点は、非トラヴェラーのメンバーたちがトラヴェラー・メンバーに対し、いっけん無責任にうつるほど厚い信頼を寄せていることである。計画の枠組み設定と人選こそ非トラヴェラー・スタッフの手によるものだったが、プロジェクトが動き出してからはトラヴェラー協力者の考えが最大限に反映された。特に、非常勤の共同研究者として迎えられたトラヴェラー、スタンリー・ロバートソン Robertson, Stanley 氏の活動は極めてユニークである。ストーリーテラーおよび歌手として活躍するロバートソン氏は、研究所内に研究室を与えられ、週4日勤務しながら、トラヴェラーの立場からのトラヴェラーへのインタビュー、学校やコミュニティー・グループへの訪問セッション、歌や物語のワークショップなどを独自に計画し、構成することができたのである。

筆者は2005年3月、最終の公開イベント<sup>(9)</sup>において講演するために渡英した。イベント当日の3月11日は、朝からトラヴェラー講師による物語・歌・造花作り・フィドルなどのワークショップ、人権擁護団体 Save the Children が制作したトラヴェラーに関するドキュメンタリー映画<sup>(10)</sup>の上演、筆者のものを含むいくつかの講演などが行なわれ、夜にはお楽しみのケイリーが催された。ここで、本稿のしめくりとして、この日行われた歌のワークショップを取り上げ、「インサイダー」の語り口が本プロジェクトの目的とどのように符合するのか、考えてみたい。歌のワークショップは2つ開講されたが、その中から、プロジェクト・スタッフのロバートソン氏が開いた成人対象のワークショップ(30分)のアウトラインに触れておこう。

今回のイベントの参加者は100名を越える盛況だったようだが、いずれも関係者の知り合いか、チラシヤ町のミニコミ誌の広報、あるいはウェブサイトなどを通じてイベントを知った人々で、皆このような場に慣れている感じだった。ロバートソン氏の歌ワークショップに参加したのはそのうちの25人ほどで、講師席を半円状に囲む形で座り、主役を待っていた。

ロバートソン氏の登場を待つ間に、このプロジェクトにおけるワークショップの位置づけを簡単に見ておこう。トラヴェラーが自文化を広く一般に伝達する場であるワークショップは、「内側の」意図がもっとも反映されやすいという点で、このプロジェクトの中核的取り組みと言える。ワークショップの方向性は、「外側の」人間がトラヴェラーをどのように「見たいか」ではなく、「内側の」人間が自分をどのように「見せたいか」、という判断に左右される。ただ、筆者にはいくぶん懸念もあった。従来のいわゆる「外からの」ベクトルが、トラヴェラーたちを「スコットランド代表」のカテゴリーに押し込もうとしたのに対し、今度は内側から、「これこそトラヴェラー文化」という戦法が取られるのではないかと思ったからである。彼らが「トラヴェラー集団」として団結することに対して消極的な人々であるにしても、今回ロバートソン氏はプロジェクトのスタッフであり、学校やコミュニティーに出向いて「教える」立場にある。人間は相手によって自分の印象を操作する、という社会学的学説を信じるならば、彼が「トラヴェラー文化」についてわかりやすく、そしてもっともらしく解説する可能性は十分考えられた。

ロバートソン氏と筆者とは旧知の間柄で、それまでに重ねたインタビュー・セッションを通じて、歌を教えるときの彼の方法論は熟知していた。歌を歌う前に、それが置かれていた環境、つまり、この歌はいつ誰がどんなところでどんな風に歌っていたのか、といった類の説明をひとわたりするのである。そこでもたらされる情報は彼の個人的なフィールドに限られており、「トラヴェラー文化一般」でもな

ければ、当然のことながら「スコットランドの伝統」といった枠組が生じる余地もなかった。今回「講師」という立場で、彼がこの方法を踏襲するかどうか、筆者の観察ポイントはそこにあった。

いよいよロバートソン氏の登場である。果たして、彼はいつもの彼そのままのやり方で、身振り手振りを交えて物語を語り、そして歌った。受講者の知るはずもない叔母についての個人的な話、燃えるような夕焼けを見ながら秋の林の歌を歌ってもらった思い出、バグパイプが上手だった叔父のエピソードが紹介され、また歌う。紙と鉛筆を使うでもなく、プリントを配布するでもなく、歌詞を教えて一緒に歌うわけでもなかった。30分から40分の間、「講師」は淡々と思い出語りをしては歌うだけで、歌の内容の解説や歌唱指導は一切なしである。

ある意味で、それは正しい選択であったかもしれない。トラヴェラーたちは決して歌や物語を「教え」たりはしない。豊富な時間の中で、彼らは同じ歌や物語を繰り返し耳にし、澱が溜まるようにごくゆっくりと、レパートリーを蓄積していく。「非効率的で組織化されない授業」や、「教わらないワークショップ」は、彼らの日常の一コマなのである。口頭伝承を旨とするトラヴェラーの役割は、対象が誰でも、個人的な思い出と共に歌を歌うことであり、歌を知りたい者はただそこにいればよい。それがたとえ「外側」社会におけるワークショップであっても、参加者に強く印象付けられるのは、トラヴェラー講師たちの今は亡き家族や親戚たちのイメージであり、個人的な思い出なのである。

ここで思い出す必要があるのは、トラヴェラー文化は、それが口頭伝承の産物であることに意味があったということである。50年前のリヴァイヴァルで彼らがもてはやされた理由を反復しよう。歌も物語も、レパートリーの面から見れば定住民文化と共通してはいるが、定住民が楽譜や文字でしか知り得なかったレパートリーが、実際に伝承されており、彼らの口から音として生まれ出ていたこと、これに人々は感銘を受けたのである。口頭伝承の真髓が、パフォーマンスをとりまく状況をまるごと伝えるふところの深さにあるとすれば、遠い祖先の思い出を、歌手のしぐさや表情、その場の情景やそのときの生活と重ねて伝えたトラヴェラー講師の方法論は、妥当なものであったと言うべきだろう。

今回のプロジェクトで回を重ねてきたワークショップは、歌や物語そのものを学ぼうと期待してやって来た人にとっては、少々失望させられるものであったかもしれない。また、トラヴェラー文化を発信するといっても、中心となって活動するトラヴェラーの人数が極めて限られていたため、「またあの人か」という不満の声も聞く。しかしながら、過去の反省を踏まえて外側から内側へという思い切った転換を成功させるには、匿名性の原則が透けて見える「国家」や「地域」、「民族」の文化を、個人やクランなど、小さくても顔の見えるところまで下ろし、それをうまく発信することが必要なだろう。結果的に、このプロジェクトは、個人から出発する集団イメージの形成に大きく貢献したと筆者は理解している。匿名性の原則に敢えて踏み込み、固有名詞を強調しながら個人に対する共感を呼び起こす。それがやがては、トラヴェラーという集団に対する共感と理解につながるのである。

個から出発する姿勢は、インタビュー記録を重視する計画からも読み取れる。そこでは、インタビューする側も、される側も、「内側」集団の成員であるトラヴェラーである。内側の視点で見た内側世界の様子が、外側の言葉への翻訳なしに提示される。ひとつひとつは断片的な情報だが、それを積み上げることによってトラヴェラー文化のある面が見えてくることになる。また、3年間で70回以上を数えた学校訪問では、「スタンリーおじさん」のお話や歌から、子どもたちはトラヴェラーの暮らしぶりを垣間見ることができたのではないだろうか。

## 7. むすび—それぞれの境界線

ひとりのトラヴェラーは、「クランの成員」でもあり、「トラヴェラー集団の一員」でもあり、「スコ

ットランド人」でもある。何とかうまくふるまってきたトラヴェラーたちではあったが、音楽シーンに担ぎ出されたことをきっかけに、アイデンティティの操作はより困難になったように見える。周囲から期待される役割と自らが求める自分らしさは、しばしば一致しなかったからだ。「クランの成員」を主張すべきときには音楽家としての個性が邪魔をし、「トラヴェラー集団の一員」を期待されるときにはクランの伝統にこだわりたくなり、「スコットランド人」になるべきときにはトラヴェラーとしての規範を強調したくなる。このような繊細にして複雑な帰属意識は、トラヴェラーに限らず、多かれ少なかれ誰もがもっているに違いない。しかしこのことは、個人を集団の一部として見続ける限り、また、文化の外側から内側を説明しようとする限り、見過ごされてしまいがちである。

アバディーン大学のトラヴェラー・プロジェクトは、集団から個人へ、外側から内側へと視点を切り替えた。その結果、トラヴェラー文化の全体像を示してくれる親切な案内人は不在となった。しかしそのおかげでわたしたちは、現実が、幻想に満ちた総体よりも、リアリティのある断片をもとに構成されていることに気付くのである。「彼ら」の文化が「わたしたち」のそれとつながっているかどうかは、個々人の感じ方次第なのかもしれない。

## 注

(1) 次の「生成の語り」とともにアメリカの文化批評家クリフォードの言葉 (Clifford 1988: 17)。「消滅の語り」とは、文化接触の過程でいずれかの文化が廃れていくことを意味するが、主に西洋文化の導入による伝統文化の崩壊という文脈で用いられる。「生成の語り」は逆に、文化変容の創造的側面を強調したものの。

(2) 1年おきにトラヴェラーの人口調査を行っている Scottish Executive の、2004年1月のデータによる。  
<http://www.scotland.gov.uk/library5/society/gttyc5-02.asp>

(3) プロジェクトの代表者イアン・ラッセルの口頭発表原稿による (Russell 2002: 1)。

(4) 英国を中心にヨーロッパ諸地域に伝わる物語歌。

(5) スコットランドの人々が行うささやかな宴会で、歌や物語、場合によってはダンスなどを楽しむものの。

(6) クランとその伝統をめぐる彼らの考え方は、日本音楽における「家元」のあり方に似ているところがある。たとえば、日本音楽ではひとつのジャンルを複数の家元が伝えていて、それぞれの家元は別個のレパートリーを持っている。中には同じレパートリーを複数の家元が伝承している場合もあるが、その場合にも手や歌のつき方が異なる。トラヴェラーも、たとえば「バラッド」というジャンルを複数の家が伝えており、それぞれの家は個別のレパートリーを有する。同じレパートリーを持っている場合にも、スタイルが異なると信じられている。

(7) トラヴェラーは「クラン」に相当する概念に対して、「クラン」という語より「ファミリー」の語を用いることが多い。

(8) 1950年代から70年代までの、いわゆるフォーク・リバイバル全盛期に行われたトラヴェラーの録音を末尾に記す (主なもの)。50年代にはフィールド録音が盛んだったが、60年代からはスタジオ録音も行われた。フィールド録音からは選集の形に編み直されているいろいろなLPやテープが作られたが、それらは省略した。

(9) アバディーン大学マーシャル・カレッジで開催された A Boorach an'a Barrie Nicht: A Celebration of the Oral and Cultural Traditions of Scottish Travellers。

(10) Save the Children の WHO WE ARE プロジェクトが制作したもので、トラヴェラーの子どもたちが自



文化を紹介し、差別問題を提起する短編ドラマ集。

### 参考文献

Barz, Gregory F. and Cooley, Timothy eds.,

- 1997 *Shadows in the field: new perspectives for fieldwork in ethnomusicology*. New York, Oxford: Oxford University Press.

Chou, Chiener

- 2002 "Experience and fieldwork: A native researcher's view." *Ethnomusicology*. 46(3), 456 - 486.

Clifford, James

- 1988 *The Predicament of culture: Twentieth-century ethnography, literature, and art*. Cambridge: Harvard University Press.

Russell, Ian

- 2002 "Researching culture from the inside: A new approach to the study of the oral traditions of Scottish Travellers", oral presentation at the 18th European Seminar in Ethnomusicology, Druskininkai, Lithuania.

Scottish Executive

2004. *Delivering for Scotland's Gypsies/Travellers*. i.

The Scottish Parliament

- 2000 *Scotland's travelling people*. The Information Centre, Research Note RN 00 - 76, 21 September, 1 - 2.

高松 晃子

- 1999 『スコットランド 旅する人々と音楽—「わたし」を証明する歌』東京：音楽之友社。

### トラヴェラーのディスコグラフィー

(リヴァイヴァルの影響で録音が多かった1950年代から1970年代までの主なもの、年代順、\*はフィールド録音)

#### Various Artists \*

- 1950 - 59 *Folk songs of Great Britain*. 10 vols.

アラン・ローマックス Alan Lomax とピーター・ケネディによるフィールド録音で、トラヴェラーの録音を含む。筆者が学部時代に初めて聞いたフィールド録音がこれ。オリジナルはCaedmonから。1961年Topicより再版。

Jeannie Robertson.

- 1959 *The great traditional singers series — Jeannie Robertson*(Topic: 10T52).

これが *The Great Scots Ballad Singer — Jeannie Robertson* として Springhyme より再版 (SPRMC 1025)。ジーニー・ロバートソンは最も成功したトラヴェラー・シンガー。トラヴェラー・プロジェクトで共同研究者を務めたスタンリー・ロバートソン氏の叔母。

Lucy Stewart \*

- 1961 *Lucy Stewart — Traditional singer from Aberdeenshire*.

オリジナルはFolkways。後にグリーントラックスよりカセットテープとして再版。*Lucy Stewart — The Child ballads*(Greentrax: CTRAX031)。

The Stewart Family

- 1966 *The Stewarts of Blair*(Topic: 12T138).

【徳丸吉彦先生古稀記念論文集】

これが *The Stewarts of Blair — Alex, Belle, Cathy and Sheila Stewart* として Ossian Records より再版 (OSSCD96)。家族で活動したトラヴェラー音楽家。後述のベル・スチュワートはこのファミリーの一員。

Various Artists

- 1967 *Festival at Blairgowrie.*(Topic: 12T181)  
フェスティバルにおけるライブ録音。

Various Artists

- 1968 *The travelling Stewarts.*(Topic: 12T179)

Lizzie Higgins

- 1968 *Princess of the Thistle.*  
オリジナルはトピックから (12T185)。スプリングタイムより再版 (Springthyme: SPRC1021)。  
リジー・ヒギンズはジーニー・ロバートソンの娘。

Various Artists \*

- 1975 *Scottish Tradition 5: The muckle sangs — Classic Scots ballads.*  
オリジナルはエディンバラ大学スコットランド研究所 School of Scottish Studies から。1992 年にグリーントラックスより CD として再版 (Greentrax: CDTRAX9005)。

Lizzie Higgins

- 1975 *Up and awa' with the laverock.*(Topic: 12TS260)

Belle Stewart

- 1976 *Queen among the heather.*  
オリジナルはトピックから (12TS307)。1998 年にグリーントラックスより CD として再版 (Greentrax: CDTRAX9055)。